

## 女性と子供の生活環境\*

— スウェーデンにみる文化としての福祉環境 —

小川 信子 日本女子大学

### 抄 録

女性の自立、女性の社会進出が世界的先進国であるスウェーデン事情を紹介しながら、母親と子どもの幸福を支える条件として、質の高い住環境の保障が大切であることを論じた。

キーワード：母子の幸福、女性の自立、社会進出、住宅環境の保障、スウェーデン

#### はじめに

スウェーデンは、人口が大変少く870万人位ですが、面積は、75万km<sup>2</sup>で日本の約1.5倍になります。北の方のラップランド地域は、殆ど凍っていて使えないとすると、日本の面積とほぼ同じです。日本は山岳地帯で山の方は使えないので大体同じくらいと考えて、そこで人口を比べますと、日本の人口は、1億1千万強ですから、人口密度では両者の差は非常に大きいことになります。スウェーデンの特殊性は、女性の労働と男性の労働を、今のような同等の状態に作りあげてきたという事もあります。

人口密度のうすい国を支えていくということになると、女性も一緒に、働かねばならないという背景もあったとは思いますがその中で、女性が働けるようにサポートする仕組みを作って来たわけです。そのサポートの仕組みの中で、私たちが学び得るものがある、ということです。国会議員の中で、女性が占める割合が30%とされています。30%の女性が国の色々な機関で働いていることは、女性の代表としての発言がそこに浸透するという、男性も女性も同じ力関係で生活ができる、土台が作れるわけです。

職場の中でも、大体45%の女性がいるわけですが、地方公務員の中でも、中間管理職の66%も女性が居る部所があります。そういう部所に、福祉関係の仕事とか、それから、住宅の政策関係のもの、特に、きめの細かい仕事に就いているということですから、その仕組みの中で、女性が働くということは、やはり、女性が働ける色々な条件を整えていると考えることができます。

一つは、学習の機会を保障する。日本のような学歴社

会とはちょっと違うということが大きいと思います。日本では、とにかく勉強して、大学に入ればいい。出るより、入ったら安心してしまいう状態です。スウェーデンの場合は無理して大学に行かず、30%ぐらいの人がストレートで大学に行きます。「どうしてそんなに慌てて大学に行くの？」という発想があり、むしろ働いてから、やっぱり勉強しよう、と思った時に勉強をする。大学に戻る。というような学校での勉強の仕方が、割合に早くから保障されています。

また、地域社会でのコミュニティースクールがあり、その学校で、事務的な勉強というものが、かなりできるわけで、自分がどういう仕事を現在しているかという事と、その仕事が多分自分にもむかなかつたならば、職も変えるということができ、そのための基礎教育を受ける事が出来ます。それが、大学でなくても、専門教育の場合もありますし、コミュニティースクールで受けられる場合もある、というように学ぶという事に対して長いスパンで計画ができます。日本でも最近、文部省が盛んに言っている生涯教育という発想です。それが早くから浸透しておりまして、自分で選んで自分の行き先を決めるという事ができる。確かに、障害児の福祉の問題とか、高齢者の福祉の問題、子供の福祉の問題をちゃんと考えているわけですが、スウェーデン社会が実現を目指し絶えず追いつけているものは、それは、特別の福祉というものじゃなくて、一般的に、むしろ全員を対象とした平等性・不偏性の問題だということになるわけです。ですから、その辺を基礎にして考えると、幼児から、成人期、高齢期と加齢していくに従って、様々なステージに即した要求に対応出来るような、安心して、豊かに暮らしていける社会の実現を目指しているわけです。私の立場から言いますと、生活環境が整備されているというふうに見たいわけです。スウェーデンの社会では、福祉

\* 本稿は、1996年2月23日に行われた北方圏生活福祉研究所主催の福祉講演会における講演要旨である。

の内容を非常に広義におさえておりますから「胎内から墓場まで」という発想になる。胎内ということは、婦人自身の健康の問題で、母親になる母体を持っている少女、それから青少年、男性も同じですけど、自分達の体を体力を整えていく環境を作っていないと、将来にむけて健康な子供が産まれないという発想なんです。そうすると産まれてから責任を持つんじゃなくて、産まれる前から責任を持つと言う事になると、皆に責任を持つと言う話になりますから、皆の環境を考えるとということになるわけです。その基本が、一番私は大事ではないかなと思うわけです。

### 住宅環境の保障

そのためにあらゆる環境を整備しようということで、一番基本的なのは社会保障の基礎が住宅保障なんです。住宅環境の保障ということ、これが非常に重要な問題になってくるわけです。その人たちが生活出来るようにする仕組みが作られるわけです。必ずしも皆が職業について本当に幸福に生活しているばかりではなく、移民の方もいらっしゃるし、色々な方達がスウェーデンの国の中には住んでいらっしゃいます。そういう方も含めてスウェーデン人として何を保障するかという話になるわけです。

もう一つの特徴と致しましては、公共的な事業を達成するために総事業を拡大しようという雇用の問題も随分よく考えています。今の国際的歪みといっしょに沈んでいる部分もありますが、働くと言う事を皆が考えてこれを保障するようになったのは、年金制度の問題も一つあるかと思えます。国民基礎年金と、働くとそれを補う国民附加年金の制度があります。附加年金の制度を柱として、その年金制度が政策、公的企業や社会サービス、住宅政策等の総合的な支えの基本になるという事になっています。現在は、社民党政権です。1994年の選挙で社民党がまた取戻しましたがその時の公約が、とにかく今のような高齢者の対応の仕方、社会での福祉政策の在り方を護る。どこまでも護る。けれども税金は上がるかもしれない、と言うのが社民党の主張だった。対して自民系の主張は、税金を絶対上げない。だけど福祉政策が今よりも下がるかもしれない。これまでのケアができないかもしれないと言って、どちらを取るかということで競ったそうですが、税金が少し上っても今のような状況を保って欲しいという事の方が多くて社民党が入ったと言うことです。五分五分の力関係で、だからこそ両方が緊張感を持ちながら政策を打ち出してというふうに見えるわけです。

そのような背景の中で、住宅政策が社会保障として動き出したのは1933年頃からです。スウェーデンは第一次

第二次世界大戦に参戦していませんから住宅が焼失していません。日本は多くの家が焼かれて、ストックがなくなりましたが、スウェーデンはストックがあったわけです。参戦しなかった理由は、今こんなに貧乏な国で戦争に加担したならば、自分の国がもしかすると、壊滅するかもしれずそれよりも自分達の生活を守る方が大事でした。国民全体がやはり自分の環境を造り上げるということに一生懸命だったのだそうです。住宅政策をたてて1933年から1970年にかけてずうっと作り上げてきました。確かにその間に色々な事態にあっているようですが、それでも住宅政策を体系的に一貫して取り上げ物的環境の整備と人的なケアを付加して生活を改善して来たと言えます。

日本とどのように違うか、スウェーデンの場合は、誰でも安心して住める環境、特に都市で生活する場合に生活環境が保障されるということが特色です。スウェーデンの場合、ストックホルムに圧倒的多数の人口が集中しているわけなので、ここを中心にして色々な政策を考えながら国造りをしているかと思えます。

### 女性の自立を支える仕組み

日本の状況は女性はとても働きにくいのです。一つは働きながら子供を産み育てるということがなかなか難しく、それは産休が十分に取れないと言うことが、まず女性が職場から去って行く一つの理由になります。そしてその後で育児休暇が取れないと言うことがあります。それから子供が病気で休むと、何か周囲の人に気がねをして職場で働きにくくなって自ら職を去るということになります。そのような周囲の理解の問題もありますが現実には仕組みが無ければ個人的には実現しにくい事だと思います。いま一つは、再就職が大変難しく、それから一度辞めてしまえば再就職を同じレベルから出発できないのです。それから家族の協力が得にくい一つの理由は、夫が家事協力をしないという事。これは色々なデータでかなり出ているんですけども最近では、若い方々では大分違って来たようで、これはむしろ「男子厨房に入らず」と言う教育を母親がしたのですから私たちの世代は皆とても苦勞して仕事を続けて来たという歴史があります。が苦勞した親も自分の息子に同じように教育しているのです。それから子供を育てる生活環境が不十分であるのが一番基本的にネックになっているのではないかと思います。

教育の問題でも最近は大分よくなりましたし、社会のある部分は、女性でもちゃんと責任が持てる地位につけるように働きかけて下さっているということも場所によっては出て来ています。ですから、中間管理職も増えてきつつあります。今までは個人的な努力では出来ない条件

があったんじゃないかと思えます。それに対して、スウェーデンと比べて見ますと、自立と子育てが一緒だということです。別々ではない。女性の自立は子育てにも通じるし、子育てをしても、女性は自立できるという形がスウェーデンなのです。その一番大きな理由は、育児休暇制度を確立しているということで、産休と育児制度は確立しており、大体賃金の90%をお休みしてもらえます。育児休暇の期間は約1年、10ヵ月という所もあります。その間、途中で子供の面倒を保育園に預けられるようになったり、保育ママに預けられるようになりますと、残りは後でも使えるというようになります。子供が病気の時に、有給休暇として使えるとか、この育児休暇を夫婦両方で使えるということです。ですから、職場で奥さんが必要とされる時は、夫が休むということで、そういう平等の精神、男女平等の精神で、生活を支え合っているのです。

保育所も充実しています。教育保障も十分に考えられています。どんな状態の時にでも教育を受ける権利を持っていますから、子供を育てて育児休暇で中断しても、また元に戻れるとか、働きながらとにかく頑張っていて、フツと勉強したいな。自分の職場を変えたいな。という時に、プラスαの勉強ができるとか、子供を育てる時に児童手当がきちんとでます。児童手当が、日本の児童手当は大変わずかなんですけれども、これはかなりがっちりとでますので、児童手当が出る年齢が高校までなので、それまでは家庭でケアをするが、その後は生活費を働いてある程度稼いでから勉強しようという事も出てくるわけです。親から月謝をもらってという日本の状況とは、話が違うかもしれません。日本の場合ですと、早く月謝をはらって、早く出て行ってほしいという感じで、まとめて親が教育計画を立てますから、その辺が違うかも知れません。自立の状態は前記のような形で出てきますから、母親はいつも自主的に子供と対応出来るというような状態にあります。住宅手当があり子供の人数に応じて住宅手当が出るので子供の人数に応じた住居に住むことができます。日本ですと子供が二人になり狭い家に居られない、広い家に移りたいけれども家賃が高い、その結果子供に費用はかかるし、家賃が高くなるということで、狭い住宅の中で、親子四人、五人生活してしまう。スウェーデンでは、一人一人部屋を保障する事になり、子供が増えればその子供の住宅手当を使って広い家に移れる、子供が出ていけば自分達が狭い家に戻る。柔軟性を持って住宅に対応するというシステムがあります。そのような制度を骨組みにして、子供を守ると言う仕組みが出てくるわけです。

### 子供のケア

子供に対しての児童養護の状況については育児休暇制度があり、満一歳位までは両親も手元で育てることが可能になりました。保育園にはその後預けますから少し子供が安定してから預けられるという状況にあるわけです。乳児院の制度もありますが、これは一歳未満の子供で、親が育てることが出来ない事情にある時、その子供は親と離して、親が病気だったり、精神的にノイローゼだったり、父親が非常に乱暴だったりなどと、様々な事情がある場合に保護するために、乳児院に預ける事が出来ます。

彼らが必死になって子供を守る理由というのは、やはり人口問題というものもありますが、最近人口が増加の傾向にあり、子供の数が増えつつあります。未来を考えた時に、人口が減るということは、スウェーデンの国力が弱くなるということで、国全体の生活としては絶対に人口を減らさないようにしています。「母の家」というのがあります。「マザーズホーム」と言ってますけれども、未婚の母親が子供を育てることがあった場合に、その母親が経済的にあまり豊かでない時、その母親と子供を、日本で言うと母子寮と言いますが、母子を共に妊娠から出産、それから出産後の保護、低年齢まで、とくに低年齢の未婚の母親というのを手厚く保護します。そこにどういう事情があったにせよそれを責めるのではなくて、むしろ産まれて来る子供達の命の問題を重視して考えるという保護の仕方になろうかと思えます。また「一時収容ホーム」があります。これは一歳以上の児童と家庭で、養護が困難な短期間の保護で、一種の養護施設ですけれども、里親を捜してその子を育てる場合もありますが、親が暴力を働いた場合に親から引き離したいという子供は、こういう「一時収容ホーム」に入れて、親が本当に改心してくるまで、その子供を保護するという事になります。そういう収容所に入れておく方が可哀相だ、と日本では思ってしまったたりして、親にいくら叩かれても、又すぐ親の元に戻ってしまいます。ちゃんと見極めて児童オンブスマンが中に入って、きちんと事件が解決されてからでないと、子供を帰さない、というような方法を取っています、「特別ホーム」というのがあり心身障害を持っていて、家庭でもケアできず里子にも行けない子供を保護しておくという所です。現在ではグループホームの形態になっています。

子供の問題というのは、極めて個人的なようですが、社会問題として考える。日本でも戦後大分、子供は社会の子供であるという事で、社会的にどうふう子供を育てたらいいのか？自分の手元で育てるより保育園で育てる方が社会性を持って早く自立できる子供になるとか、プラス・マイナス様々交々言われましたが自分の手

で縛りつけて育てるという事よりも、社会性が持てるように、もっとゆったりとして育てる考え方に日本の場合も変化してきましたが、スウェーデンは、日本よりも早くから子供の成長発達について親と社会が一体になって保障しつつあるのではないかな、という感じがします。

スウェーデンでは人々が自立できる生活、女性の社会的進出、子供のケアなどを保障した結果、1970年以降、人口が増えていくわけです。1990年の段階で申しますと、日本は出生率1.53になってしまったのです。スウェーデンは2.02というふうに人口は増えていくわけです。現在も出生率は上向きのままです。

日本も一度落ち込んで、又少し元に戻ったと申しますが、それでもまだちょっと追いつかないというような事です。スウェーデンで出生率が増えたというのは、単に増えただけではなくて、社会的な保障というのがあって初めて増えて来たという事だと思います。

#### おわりに

基本的には、やはり子供側から考えますと、子供の生活を守って、より良い環境を創るという事。それは、どういう事かと言うと、子供の生存権、発達権、生活権、教育権を守るという事に他ならないのではないのでしょうか。

その為に、子供の環境を整備する必要性を永遠の課題として、スウェーデンは考えているということだと思います。子供の環境を考えるということが、母親の生活を

考え、家族の生活を守ることと同一であるという。この辺が大事です。子供は子供、親は親ではなくて、子供の生活を守ろうということ、環境を守ろうということは、親と家族の生活を守る事と同一だというのが、大変大切な要点だと思います。子供の問題は、個人の事として終わるのではなく、その国の未来を左右するものというふうに思います。

住環境を専門とする立場から、子供の養育にとっての基本的問題を挙げると、1. 個人の自立を重視すること。それをする為の拠点を確保する環境を創ること。2. 子供の生活空間を計画するためには生活内容をその生活領域別に受けとめて、それぞれに適した空間を確保するような豊かな環境を創り出すということ、になろうかと思っています。

子供を、小さい時の小集団から、広がりのある人間関係が作れるような生活空間に置くことが大切です。建築家、環境を考える人は、その生活空間ができるようにする。個人の生活が守られるということは、その人が自分で考え、行動できる自由を保障するという事になるわけです。スウェーデンは、ノーマライゼーション、インテグレート、イコーリィティの理念のもとに、幼児期から学童期を経て大学で学び社会に出て働く過程の中で、各人の行動の選択を保障し、広く社会人、国際人として育てて行くという人間関係をつくる力を持てるようにしています。日本の子供たちもこれからは、自分で考える自立する力を養うことが、基本になろうかと思っています。

## Quality Housing for the Well Being of Women and Children in Sweden

Nobuko Ogawa, Ph.D., JAPAN Women's University

#### Abstract

It was pointed out that one of the important factors for the well-being of mothers and children was the arrangement and supply of comfortable housing of good quality, depending on the data of conditions in Sweden.

Key words: well-being of mothers and children, women's participations in society, housing of good quality, SWEDEN